「ブラジル人親子支援プログラム」参加を通じた学生の異文化理解

高山育子（東海学院大学）・長谷部和子・杉山喜美恵（東海学院大学短期大学部）

0．ブラジル人親子支援プログラムとは

筆者らは、2008年度より東海学院大学・同短期大学部（以下本学）保育実習室「あそびの森」にて、日系ブラジル人親子を対象とした支援活動を行なっている[1]。この支援プログラムには、①日系ブラジル人の子どもたちの支援、②日系ブラジル人保護者支援、③学生育成、④地域交流という４つの目的がある。本報告では、③学生育成について、特に異文化理解の視点からプログラムの教育効果について検証を行なう。

1．本学保育者養成における異文化理解

本学保育者養成における異文化理解（教育）の意義を次の３点に見出している。①岐阜県は全国的に見てブラジル人をはじめとする外国籍人口が全人口に占める割合が高く、外国籍の子ども・保護者によりよい保育・教育環境を提供する人材として本学学生を育てる必要がある。②「保育所保育指針」には「外国人など、自分と異なる文化をもった人に親しみを持つ」、「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるよう配慮すること」（第３章 保育の内容）と外国籍の子どもへの配慮が明記されており、異文化理解は保育者として必要な経験、能力の１つである。③さらに異文化を理解するために必要なコミュニケーション・スキルや自己・他者の理解力、共感力などを磨くことで、保育者・教育者としての資質向上を期待している[2]。

現状では、大学、短期大学部とも本学には異文化理解のための専門科目はなく、本プログラムは学内で外国籍の親子とふれあうことのできる貴重な機会となっている。

2．2010年度プログラムの内容

2010年度は10月から１月までの毎月１回、計４回プログラムを開催した。開催日はすべて日曜日であり、14時から16時までの２時間、子どもと保護者の活動を分けて行った。子ども対象の活動では、全体で行なうあそび（パネルシアターや手あそび、読み聞かせなど）の時間も設けたが、各回とも開催時間のほとんどが自由あそびであり、会場である本学保育実習室に設置されている木製大型遊具やキーボードのほか、かるたや折り紙、ボール、紙、マジックなどを使って遊んだ後、学生と子どもは一緒におやつを食べた。

保護者対象の活動では、第１回から第３回までは日本語講座を行ない、第４回は日本語スピーチコンテストを開催した。日本語講座・スピーチコンテストが終わると、保護者は子どもたちがおやつを食べている部屋に移動し、本学が用意した生活支援物資を選んでいた[3]。学生には、日本語講座に関心があれば講座の手伝いをして欲しいと伝えたが、講座の様子を見に来る学生はいなかった。おやつの時間も、ほとんどの学生は子どもたちと一緒に食べており、保護者と積極的に関わりを持つ姿はみられなかった。ただし、第４回のスピーチコンテストでは、子どもの人数が少なかったこともあり、保護者のスピーチを聞くよう促し、何人かの学生は最初から最後までスピーチを聞いていた。プログラムの内容を表１にまとめている。

日系ブラジル人参加者は３年前から続けて来ている家族もいるし、今年度１回だけ参加したという家族もいる。チラシの配布、ポスターの掲示、各務原市支援員からの呼びかけを通じ、就学前の子どもがいる日系ブラジル人家族を対象に募集しているが、きょうだいがいたり、友

表１　プログラムのスケジュールと参加者の動き

	保護者	子ども	学生
14:00	はじまりの挨拶【保育実習室】		
14:10-15:30	日本語講座 ＊ 【751教室】	自由あそび 【保育実習室】	
15:30-16:00	支援物資えらび【学生ホール】	おやつ【学生ホール】	
16:00	おわかれの挨拶【学生ホール】		

【　　】内は会場名
＊第４回はスピーチコンテスト

人伝えに参加を希望する人もいるため、子どもたちの年齢は乳児から高校生まで幅広くなっている。参加してくれた子どもはのべ51名で、実人数は36名である。年齢の内訳は、中学生以上6名、小学生17名、就学前（0～6歳）12名である。子どもたちは、日本の学校（保育園）に通っている子もいれば、ブラジル人学校に通っている子もいる。また、父母の国籍はブラジルが多いが、ペルーもある。滞日年数はさまざまであり、日本語で自動車運転免許を取得した人もいるし、まったく話せない人もいる。保護者へは通訳を介して日本語講座を行なったが、子どもたちには通訳はつけなかった。

表２　プログラムの参加者数

	第１回	第２回	第３回	第４回	合計
	10/24	11/21	12/19	1/23	
参加者計	21	14	28	23	86
（家族数）	(5)	(5)	(10)	(11)	(31)
大人	5	6	12	12	35
子ども	16	8	16	11	51
スタッフ計	7	11	29	24	71
学生	1	4	22	18	45
教員	4	5	6	5	20
通訳	2	2	1	1	6
その他	0	1	2	4	7
合計	28	26	59	51	164

各回とも、保育者や教諭を志ざす大学と短期大学部の男女学生が参加した[4]。各回の参加学生数は表２に示すとおりである。第１回（10/24）は大学祭と同日に開催した。本学学科構成の特性から、大学祭では子どもが楽しめるイベントや出し物が多いため、本プログラム用の子どもの遊び場を用意しなかった。このため、本プログラムに参加した学生は１名と少ない。のべ参加人数は45名であるが、３回参加した者１名、２回参加した者３名と、複数回参加した学生もいるため実人数は40名である。

次に、参加学生の内訳を表３に示す。大学10名に対し、短期大学部30名である。また、学年は大学、短期大学部それぞれ１年生は８名、16名、２年生以上２名、14名である。２年生以上は、１名を除いて2009年度のプログラムにも参加した経験がある。

１年生はいずれの実習もまだ経験していない。一方、２年生以上はすべての実習（保育実習、幼稚園教育実習または小学校教育実習）を終えており、短期大学部２年生のほとんどは就職先も決まっていた。

３．学生の異文化理解とプログラムでの学び
―アンケート調査の結果から―

３－１．学生の姿

第３回および第４回のプログラム終了後、参加学生にアンケート調査を実施し、学生の姿や異文化理解について測定した[5]。質問項目は、学生のこれまでの異文化接触経験、プログラムへの参加動機、プログラムの体験内容、日本の子どもとのかかわり方と異なると思う点・同じと思う点、プログラム参加で得たもの、居住地、就職先の希望、実習状況などである（選択式と記述式の混合）。なお、授業の評価に使うなど、本プログラムの評価に用いる以外の用途で用いないことを明言して、アンケート用紙には氏名を記載してもらった。

プログラムへ参加した実人数40名に対し、アンケートへの回答が得られたのは37名（回答率92.5％）であった。数量解析を行うにはケース数が少ないが、対象者に対して100％に近い回答が得られているので、以下では数値で結果を示すとともに、クロス集計表ではχ^2検定を行なう。

まず、プログラム参加以前の、学生の日系ブラジル人との関わりについてみていこう。記載された実家所在地から判断すると、実家が外国人集住都市会議会員都市[6]

表３　プログラム参加学生数およびアンケート回答率

所属	学年	在籍者数	2010年参加人数（参加人数／在籍者数×100）	2009年参加人数（2010年参加人数／2009年参加人数×100）	アンケートへの回答者数（回答率）
大学（四年制）	１年	47人	8人（17.0%）	―	8人（100.0%）
	２年以上	―	2人（ ― ）	1人（50.0%）	2人（100.0%）
短期大学部	１年	77人	16人（20.8%）	―	14人（87.5%）
	２年	80人	14人（17.5%）	14人（100.0%）	13人（92.9%）
合計		277人	40人（14.4%）	15人（37.5%）	37人（92.5%）

にある学生（以下「集住都市居住者」と表記する。またそうでない学生は「非集住都市居住者」と表記する）は、７名（18.9%）であった。2011 年４月１日現在、会員都市は 28 市町であるが、これらは群馬県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、岡山県の８県に集中している。本学へは、県内の会員都市である大垣市、美濃加茂市、可児市はもとより、小牧市（愛知県）、長浜市（滋賀県）、鈴鹿市（三重県）など交通の便がよく自宅通学も可能な近郊会員都市から、毎年入学者がいる。これら 28 市の人口を合計すると日本の総人口の 3.9%であることから考えると、本プログラムへの参加学生は外国人集住都市会議会員市出身者が多いといえる[7]。

また、「これまでに日系ブラジル人と関わる経験があった」と答えたのは 24 名（64.9%）で、その内訳（複数回答）は「高校までのクラスにいた」（15 名、40.5%）、「知人・友人にいる／いた」（9 名、24.3%）、「近所に住んでいる」（5 名、13.5%）などであった（表４参照）。参加した学生の３分の２は、日系ブラジル人が身近な存在であることを示している。

「集住都市居住」かどうかでみると、「集住都市居住者」で「経験がない」と回答した者は０名（＜.05）で、また、「実習園にいた」と回答した者は「集住都市居住者」は２名いたが、「非集住都市居住者」は０名（＜.05）であった。

表４　日系ブラジル人に関わった経験

なし*	13	35.1%
あり	24	64.9%
高校までのクラスにいた	15	40.5%
知人・友人にいる／いた	9	24.3%
近所に住んでいる	5	13.5%
実習園にいた*	2	5.4%
その他	2	5.4%

複数回答。%は回答者 37 人に対する割合。
＊は「集住都市居住者」と「非集住都市居住者」にわけて χ^2 検定した結果。***＜.001、**＜.01、*＜.05

ところが、「日系ブラジル人をめぐる歴史や入管法改正、子どもの就学などについて何か知っていますか」という問いに対しては、22 名（59.5%）が「何も知らない」と回答している。「知っている」と回答した内訳（メディア）については（複数回答）、「授業で聞いたことがある」（11 名、29.7%）、「新聞やニュースで聞いた／見たことがある」（6 名、16.2%）となっており、日系ブラジル人について知るためには、授業が重要な場になっていることを示しているとともに、本や自治体の広報などから積極的に情報を得ているものはごく少数であることが示された。これは、「集住都市居住者」でも同じである（表５参照）。

表５　日系ブラジル人についての知識

なし	22	59.5%
あり	15	40.5%
授業	11	29.7%
新聞・ニュース	6	16.2%
本	1	2.7%
自治体の広報	3	8.1%
その他	0	0.0%

複数回答。%は回答者 37 人に対する割合。
＊は「集住都市居住者」と「非集住都市居住者」にわけて χ^2 検定した結果。***＜.001、**＜.01、*＜.05

「知っている」内容について自由記述を求めたところ、「職を求めて日本へ渡ってきたことなど」、「就職できる場が限られている」、「日系ブラジル人が今とても増えているということ。美濃加茂市が（人口比―引用者）１位ということ」、「ブラジル人は日本に多い」、「ブラジル人の方向けの商業施設が地元にできた。広報がポルトガル語」「小学校で日本語が分からずついていけない」「子どもとのかかわり方」「小・中学校の時、授業で話を聞いたことがあるが、記憶にしっかり残っていない」が得られた。

３－２．学生の学び

本プログラムへの参加理由を尋ねた結果（表６、複数回答）、「少しでも子どもにかかわる機会を持ちたい」（15 名、40.5%）、「先生に誘われた」（14 名、37.8%）、「授業の補講として」（12 名、32.4%）の３つを挙げた者が多かった。本学では日本人親子を対象とした子育て支援プログラム「あそびの森」を定期的に実施している。本プログラムはこの「あそびの森」の「日系ブラジル人版」ともいうべき存在である。このため、授業やゼミで「あそびの森」に参加し、主体的に学んだ経験をもつ学生にとっては、少しでも自分のためになると考えて参加しているのであろう。また、我々教員は本プログラムが学生にとっての学びの場となることを期待しているため、授業の補講の場としたり、関心がありそうな学生に参加を呼び掛けたりしている。なお、参加理由と「集住都市居住者」との関係を調べてみると、「集住都市居住者」で「授業の補講として」を選んだ者はいなかった。その他の項目では有意な差は検出されなかった。

子どもの接し方、保護者との接し方について、それぞれ学んだことを自由記述で回答してもらった。この中で、特に異文化理解と関係のある回答を紹介し、考察する。

「子どもとの接し方で学んだこと」には 32 名（86.5%）が回答しており、言葉について書いたものが多く見られ

表６　プログラムへの参加理由

少しでも子どもにかかわる機会を持ちたい	15	40.5%
先生に誘われた	14	37.8%
授業の補講として*	12	32.4%
日系ブラジル人に興味・関心があるから	7	18.9%
外国人に興味・関心があるから	5	13.5%
少しでも保護者にかかわる機会を持ちたい	3	8.1%
友達に誘われた	3	8.1%
その他	2	5.4%

複数回答。%は回答者 37 人に対する割合。
* は「集住都市居住者」と「非集住都市居住者」にわけて χ^2 検定した結果。
***<.001、**<.01、*<.05

た。「言葉の壁がやはりあった」、「日本語があまり分からない子が多いと感じました」、「言葉が通じにくくて難しいときがあった」、「言葉が通じなかったりするので、言葉がなくても気持ちを理解するのはより大変だと感じた」、「言葉が通じなかった分、何をしたいのか理解が難しかった」、「小さい子は日本語が通じているのかわからなくなる時が大変だった」など、言葉が通じないことに難しさを覚えたという感想があった。

これに対し、「言葉は通じなくても動きなどで分かるし、楽しいと思えるときは同じだと思った」、「言葉が通じなくても楽しく遊べました」と言葉でのコミュニケーションそのものを気にしない対応をしたという学生や、「簡単な日本語で簡潔に話すことが大切」、「言葉があいまいな子に対しては、動作などで理解しやすいように対応することが大切だと思いました」と、言葉で伝える場合に意識するべき点に気づいたり、「子どもの興味・関心がどこにあるのか判断するのが大事だと学んだ。やはり、少し日本語が通じない部分もありましたが、それ以上に遊び・動き・表情でコミュニケーションがとれて日本人とほとんど変わりがないと感じた」、「日本語が上手に話せないので、ジェスチャーでやったり、笑顔や顔を作って（おもしろい顔など）接すると自然に子どもも笑顔になってくれるなと思いました」、「日本語があまり通じない子の対応は少し難しかった。体を動かす遊びはどんな子でも楽しめていたと思う」など、言葉が通じなくても一緒に楽しめるあそびを考えるといった対応をした学生もいたようである。

「日本の子どもと違うと思ったこと」としては、「とても活発だなと思いました」、「人見知りが少ない」、「日本人よりも元気な子が多い気がした」、「日本の子どもに比べて、成長が早い気がした」、「１歳くらいの子でも足どりがしっかりしていて、体つきも強く感じた」などの印象を受けたようである。もちろんこれらは国籍によって異なるのではなく子どもによって異なるのであるが、人見知りをしない明るい子が多い、という印象や子どもの体格の良さは筆者らも感じていることである。また、新生児にピアスの穴を開けたり、小学生でも女の子は大人っぽい服装をしているということも感じる。これらの違いは、その社会の「子ども観」の現れであろう。このような違いを感じ取ったようである。

さらに、「名前を知る所から日本人との違いを感じました」というのは、子どもには名札を作って胸に貼っていたのであるが、ブラジルでの名前の発音は英語とも異なり、カタカナで表記しにくい。何度も聞き返して、なんとか名前を書いていたことを指しているのであろう。

一方、「日本の子どもと同じだと思った点」としては、「同じと感じたことは何にでも興味津々で室内で元気に走って遊んでいたことです」、「人見知りするところは、同じだなぁと思った」、「日本の子どももブラジルの子どもも興味を持つものは一緒だった」、「興味を持つことは同じだった。やっぱり歳が上の子のまねをする」という回答があった。特に乳児のかわいらしさというものは、万国共通であろう。他に「日本もブラジルも何も変わりを感じなかった」、「そんなに変わらなかった」、「日本の子どもと変わらない接し方で楽しく遊ぶことができる」などブラジルの子も日本の子も同じであることを書いているものや、「年齢が小学校くらいの子が自分が満足するまで遊んでいた」、「うんちをしたタイミングがわかった」、「乳幼児の子とはじめて遊んで、接し方がわかった」、「子どもと目線で話すことの大切さ」など、同じであること／違うことをまったく気にしていない回答もあった。

次に、「保護者との接し方で学んだこと」に対しては、14 名（37.8％）と回答数は「子どもとの接し方で学んだこと」に比べて少なかった。そもそも保護者と言葉を交わしたりしていない学生が多いためである。

子どもたちとの接し方同様、「親の方が日本語をあま

り使わない」、「言葉で伝えることが難しいと思いました」と言葉の面を挙げる回答が多く、「日本語があまりできない人でもジェスチャーなどでわかりあえた」、「言葉が通じないので、表情でニコニコしておくことが大切」、「ジェスチャーもコミュニケーション方法の１つ」、「言葉が通じなかったりするのでジェスチャーとかでコミュニケーションをとる必要がある」、「言葉が通じなくても目を見て話す」など非言語コミュニケーションを実践したようであった。なかには、

> △△ちゃんのお父さんと話すことがあったのですが、お父さんは△△ちゃんが日常においてベランダ（５階の）で台の上に乗ったりとか頭をぶつけたりなど危なくヒヤヒヤさせられることがあると言っていました。そのはなしを聞き、「そうですね。好奇心旺盛なんですね」と共感したりすると他の事（指をなめる）を話してくれました。どんなにことばが聞き取りにくかったりしても、相槌を打ったり話を聞くことで、コミュニケーションが取れるなと思いました。今日は△△ちゃんのお父さんと話ができて勉強になりました

と、長文の感想を書いた学生もいた。保護者の方に子どものことをもっと話したい、聞いてもらいたいという気持ちになってもらったことは、学生にとっても本プログラムにとっても収穫であったと思う。

他には、「外国籍の方（大人）は言葉の壁はあるものの、日本の方よりも友好的であるように感じます」、「保護者同士ハグしていたり、コミュニケーションの取り方が違った」という違いを書いた回答、「保護者とはあまり関わることができなかったのですが、日本人の保護者と特に変わることはないと感じた」と同じ点を書いた回答、同じ／違いに関係なく「子どものあやし方」、「子どもの楽しませ方」を学んだと書いた回答があった。

４．まとめと今後の課題

プログラムに参加した学生たちは、日系ブラジル人の子どもと遊ぶことをとても楽しみにしており、言葉が通じなくても笑顔やジェスチャー、あそびを通じてコミュニケーションをはかっている[8]。また、日本人の子どもとの違いは、「活発」、「元気」、「人見知りしない」など肯定的な受け止め方をしている一方で、日本人の子どもに対するのとは異なる対応の仕方も自ら考え、試行錯誤しながら学んでいる。こうした前向きで、いきいきとした学生の姿はたいへん好ましく、頼もしいと感じている。

ところが、参加学生へのアンケート結果からは、これまで日系ブラジル人と関わる機会があった者が多い反面、意識して日系ブラジル人が置かれている状況や日本で暮らすなかで感じる思いに目を向けたり、語学を学んだりするなど、積極的に日系ブラジル人について「知ろう」としている者は少ないことがわかった。筆者らが学生と話した印象では、たとえ就職直前の短期大学部２年生であっても、また、これまでの学校生活や実習場面に日系ブラジル人の子どもがいたという経験があったとしても、日系ブラジル人家族が抱える困難や問題、それへの対応などを保育士や幼稚園教諭、小学校教諭として強く意識している学生は多くない。本プログラムへの参加動機が「子どもとふれあう学びの機会」であることは嬉しい反面、日系ブラジル人など異文化の子どもや保護者の状況を理解するという動機も併せ持ってほしいと思う。

今後は、学生たちが持っている「子どもはみんな同じ」という素朴な感受性を大切にしながら、加えて、保育所や幼稚園、小学校など現場の先生方が抱えている問題、不就学問題、進学問題、就職問題、非行などについても正確に伝えることを教員側で意識し、学生が異文化についてより理解を深めることで、本プログラムに主体的に参加できるようにし、実践的なスキルを身につけることができるような学びの場にしていきたいと考えている。

さらに、日系ブラジル人の子どもたちの就学前教育や義務教育の機会が保障され、保育・教育内容が充実したものとなるためには保護者の協力が欠かせないと筆者らは考えている。そのため、2010 年度プログラムでは日本での子育てについて日本語で話をしてもらうスピーチコンテストを初めて行った。学生に対しては保護者への関心を向け、かかわるきっかけを作ること、外国籍の人が日本における子育てで難しいと感じる点を知ってもらいたいことという意図があり、外国籍の保護者に対しては、日本語で話す場を作りたかったというねらいがある。

プログラム全体に対する感想（自由記述）のなかに、「スピーチコンテストが聞けてよかった」と書いた者が７名いたことは、学生の異文化理解に直接資することができたと評価している。一方で、中には「私たちの人数に対して子どもの数が少なかった」「子どもの人数が今回は少なくて、目的があまり見えなかった」という感想を書いた者もいた。子どもたちとかかわることに「楽しさ」を感じるのみで、その子どもがどのように育っているのか、保護者の気持ちや願いはどのようなものか、といった養育の背景に思い至っていないのであれば残念であり、来年以降も引き続き意識して学生を指導していきたい点である。

註

1 各年の実施内容は 2008 年度分は第 62 回保育学会（杉山 2009)、全国保育士養成協議会第 48 回研究大会（高山・杉山・長谷部 2009）で、2009 年度分は全国保育士養成協議会第 49 回研究大会（杉山・長谷部・高山 2010）で発表したほか、『東海学院大学短期大学部紀要』第 36 号（長谷部・杉山・高山 2010b）および同 37 号（長谷部・杉山・高山 2011a）に掲載している。なお、本論文は第 64 回保育学会におけるポスター発表 長谷部・杉山・高山「『ブラジル人親子支援プログラム』参加を通じた学生の異文化理解」（2011 年 5 月）にもとづいて作成した。

2 たとえば森（1999)、甲斐（2010)。

3 2008 年のリーマンショックの余波でブラジルへの帰国を余儀なくされる人が相次いだという報道を受けて、開催初年度は本学学生、教職員の協力を得て、衣服や毛布、おもちゃ、生活必需品などを集めて無料配布した。以後毎年、同じように生活支援物資を用意した。ご協力いただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げる。

4 大学部は保育士、幼稚園教諭 1 種、小学校教諭 1 種の資格・免許が、短期大学部は保育士、幼稚園教諭 2 種の資格・免許が取得できる課程である。

5 本論末にアンケート用紙を資料として添付している。

6「外国人集住都市会議」とは「ニューカマーと呼ばれる南米日系人を中心とする外国人住民が多数居住する都市の行政並びに地域の国際交流協会等をもって構成し、外国人住民に係わる施策や活動状況に関する情報交換を行うなかで、地域で顕在化しつつある様々な問題の解決に積極的に取り組んでいくことを目的として設立するもの」（同会議 H.P.（http://www.shujutoshi.jp/gaiyou/index.htm）であり、2001 年 5 月に第 1 回会議が開催された。

7 学生調書など正式なデータとしては確認していないが、2010 年に行なった大学子ども発達学科 1 年生（回収率 100.0％)、短大部幼児教育学科 1，2 年生（回収率 1 年生 92.2％、2 年生 66.3％）を対象とした別のアンケート調査の結果では、四大 1 年生 25.5％、短大部 1 年生 15.6％、短大部 2 年生 7.5％が集住都市会議会員都市出身者であった。このことから推測すると、本学にはそもそも集住都市会議会員都市出身者が多く、プログラム参加学生に極端に集住都市会議会員都市出身者が多いということではないようである。

8 長谷部・杉山・高山（2010b)。

引用・参考文献

甲斐仁子（2010）「異文化理解教育の研究―アンティバイアス教育と保育者養成」『藤女子大学紀要』第 47 号，第Ⅱ部，pp.83-96.

森眞理（1999）「米国の多文化教育者養成に学ぶ―保育者養成における多文化教育の可能性を求めて―」『保育学研究』第 37 巻第 1 号，pp.13-20.

高山育子・杉山喜美恵・長谷部和子（2009）「ブラジル人親子支援プログラムの実践報告」『全国保育士養成協議会 第 48 回研究論文集』pp.166-167.

杉山喜美恵（2009）「学生における外国籍親子支援プログラム参加の意義」『日本保育学会第 62 回大会研究発表論文集』p.370.

長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子（2010a）「ブラジル人親子支援プログラムの実践報告 NO.2」『全国保育士養成協議会第 49 回研究論文集』pp.158-159.

杉山喜美恵・長谷部和子・高山育子（2010）「ブラジル人親子支援プログラムの実践報告 NO.2 － 2　－保護者対象講座、懇話会から推察される親のニーズを中心に－」『全国保育士養成協議会 第 49 回研究論文集』pp.160-161.

長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子（2010b）「ブラジル人親子支援プログラムの有効性に関する一考察」『東海学院大学短期大学部紀要』第 36 号，pp.23-32.

長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子（2011a）「ブラジル人親子支援プログラムの有効性に関する一考察 No.2」『東海学院大学短期大学部紀要』第 37 号，pp.57-63.

長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子（2011b）「『ブラジル人親子支援プログラム』参加を通じた学生の異文化理解」『日本保育学会第 64 回大会研究発表論文集』p.370.

資料（学生アンケート）

2010　ブラジル人親子支援プログラム
参加のふりかえり

これは、プログラムを振り返って、良い点や悪い点を反省するためのヒントにするためのものです。記名してもらいますが、成績の評価に使ったり、あなた個人のお考えとして発表したりすることはありません。経験したこと、感じたことをそのまま書いてください。ご協力、よろしくお願いします。

所属　幼児教育学科　／　子ども発達学科　　.....年
（どちらかに○）

氏名　.....

現在お住まいの市　　（　　）県（　　）市・町・村

実家がある市　　（　　）県（　　）市・町・村

最初に、今年度のプログラムについてうかがいます

１．今年度、どの日に参加しましたか。（あてはまるものすべてに○）

10/24　・　11/21　・　12/19　・　1/23

２．今年度、参加した理由はどれですか。（あてはまるものすべてに○）
　１．授業の補講として
　２．少しでも子どもに関わる機会を持ちたかったから
　３．少しでも保護者に関わる機会を持ちたかったから
　４．日系ブラジル人に興味・関心があるから
　５．外国人に興味・関心があるから
　６．先生に誘われたから
　７．友達に誘われたから
　８．その他（具体的に　　）

３．これまでに日系ブラジル人と関わる経験はありましたか。（あてはまるものすべてに○）
　１．高校までのクラスにいた
　２．知人・友人にいる／いた
　３．実習園にいた
　４．近所に住んでいる
　５．その他（具体的に　　）
　６．関わったことはない

４．日系ブラジル人をめぐる歴史や入管法改正、子どもの就学などについて何か知っていますか。（あてはまるものすべてに○）
　１．授業で聞いたことがある
　２．新聞やニュースで聞いた／見たことがある
　３．本などで読んだことがある
　４．市の広報で呼んだことがある
　５．その他（具体的に　　）
　６．何も知らない

S４．どのようなことを知っていますか。

５．今回のプログラムに参加してどうでしたか。（あてはまるもの１つに○）
　１．とても面白かった
　２．面白かった
　３．なんともなかった
　４．つまらなかった
　５．まったくつまらなかった

S５．その理由を教えてください。

６．子どもとの接し方で学んだことはありますか。日本人の子どもと違うと感じた点、同じと感じた点など教えて下さい。

７．保護者との接し方で学んだことはありますか。

裏に続きます→

８．一緒に遊んだりはなしをしたりして、印象に残っている子どもについて、名前や学校名、学年、来日年数など知っていることがあったら教えてください。

９．来年度開催するとしたら、改善したらいいと思う点はありますか。時間、内容、備品、おやつなどどんな小さなことでもかまいませんので、気づいた点があったら教えて下さい。

１０．　その他、プログラムについて感じたこと、学んだことを自由に書いてください。

１１．　昨年度のプログラムに参加しましたか。（あてはまるもの１つに○）
　１．知らなかった
　２．知っていたが参加しなかった
　３．参加した

ここからは、昨年度参加した人に伺います。
昨年度参加しなかった人は以上で質問は終了です。ありがとうございました。

１２．　【昨年度参加した人に】昨年度と比べて今年のプログラムはどうでしたか。（あてはまるもの１つに○）
　１．良くなった
　２．変わらない
　３．悪くなった

Ｓ１２．【昨年度参加した人に】どのような点でそう思いますか。

１３．　【昨年度参加した人に】昨年から今年までの**あいだに**、ブラジル人親子と関わるために準備や勉強をしましたか。**プログラム参加中のことは除いてください**。（あてはまるものすべてに○）

１．日系ブラジル人に関するニュースが気になるようになった
２．日系ブラジル人の子どもの保育・教育環境が気になるようになった
３．地域の日系ブラジル人の状況について調べた／知った
４．日系ブラジル人の歴史や文化について調べた／知った
５．ポルトガル語の勉強をした
６．国籍や言語、文化にかかわらず子どもとの接し方について学んだ
７．その他（具体的に　　）
８．何もしなかった

１４．　【昨年度参加した人に】昨年度プログラムに参加した経験は、実習などで役に立ちましたか。（あてはまるものすべてに○）

１．実習園で日系ブラジル人に接する機会があり、役に立った
２．実習園でその他の外国人に接する機会があり、役に立った
３．日系ブラジル人であれ日本人であれ、子どもと接することに役立った
４．日系ブラジル人であれ日本人であれ、保護者と接することに役立った
５．身近な日系ブラジル人と接することに役立った
６．身近な外国人と接することに役立った
７．その他（具体的に　　）
８．特に役立っていない

Ｓ１４．どのような点で役に立ちましたか。

１５．　その他、何でも感じたこと、学んだことを自由に書いてください。